



チーフのイギリス人は何か魅力がある

紳士の国の英国航空

「イギリスの恥？」

掲載の二枚の写真には、いずれも私が写っており目障りだろう。私も顔が知られると地元のスーパーで半額の

弁当が買にくくなる。しかし、日本語しか話せない私が外国の旅客機に乗り、なぜこんな写真を撮られたかを

書きたいのでお許しを願いたい。妻は足が不自由なので空港では車椅子をお願いしている。今回も搭乗時は最初に機内に入り、降りる際はほかの乗客の迷惑にならないよう一番最後に降り



ることになっていた。ところが、乗客が全員降りても指示がない。しばらくすると客室係責任者の男性が来て「車椅子はあるが、押す係がまだ来ないので待つてほしい」と言う。そして客室乗務員がクッキーやケーキなどの入った袋を持って来てくれた。係員が遅れていることへのお詫びの気持ちの表れだろう。

ファーストクラスとビジネスの間にあるキッチンと呼ばれるところにケーキや飲みものがあり、飛行中、自由に飲食できる。その残り物かもしれないが気持ちがいい。チーフの男性は英語が話せる娘とロンドン観光の穴場などの話で盛り上がる。

私が郷土紙に旅のエッセイを書いていることを知ると「記念写真があった方がいいでしょう」と写真を撮ってくれた。さらに私がファーストクラスに乗っ

たことがないと言われる。客室乗務員がファーストクラスに案内し、写真まで撮ってくれたのである。

前回、プレミアムエコノミーからビジネスに娘の席がランクアップされたことを書いたが、ビジネスとエコノミーの間のプレミアム・エコノミーはエコノミーよりも少し座席幅が広く、足まわりの空

間もゆったりしている。しかしビジネスのようにベッドにはならず、エコノミーより大幅にリクライニングの椅子を後ろに倒すことができる程度だ。

話が横道にそれたが、写真撮影を終え、自分の席に戻ったが、まだ車椅子の担当者は来ていなかった。チーフの男性は「イギリスの恥だ。自分たちで押して行こう」と言い、結局、空港の出口まで我々を送ってくれた。

客室係は十一時間余の飛行中、仮眠する時間ほとんどないという。にもかかわらず、

仕事のあと二十分以上、私たちと行動をとりにしてくれたのである。サービスだと言ってしまえばそれまでだが、笑いを絶やさず親切にしてくれた男性の中にイギリス紳士を見た気がする。

こうしたちよつとした好意が旅を豊かなものにしてくれる。同時にもし英語の話せない私たち夫婦だけなら、イギリス紳士との関係も変わっていたらう。改めて語学力の必要性を痛感する。

しかしもう手遅れ。でも、イギリスには学びたい何かがある。

生涯、この席を利用することはないだろう



生涯、この席を利用することはないだろう